



旧村川別荘だより

170号

令和3年12月22日発行
 旧村川別荘市民ガイド事務局
 我孫子市教育委員会 文化・スポーツ課
 歴史文化財担当：斉藤、手嶋、今野、柏瀬
 〒270-1166
 我孫子市我孫子 1684 番地
 TEL:04-7185-1583 (直通)
 E-mail:abk_bunka@city.abiko.chiba.jp

12月の月例会について

12月の月例会には、白樺文学館学芸員の稲村さんより11月17日から開催されている企画展「山田百合子と原田京平—我孫子への物語」について、展示解説がありました。

「山田百合子と原田京平—我孫子への物語」

○山田百合子（1899年～1995年）とは

歌人。海軍軍医実吉安純の長女。結婚し、夫の転勤先のニューヨークから帰国後、短歌を本格的にはじめます。その時の様子は、百合子が書いた『マイ ハッピー オールド デイズ』のなかにある「短歌とわたし」で紹介されています。そこからわかるのは、



山田百合子

- ①短歌の師である宇津野研との接点は、百合子の兄と同じ時に医師を志し、一緒に勉強していた
 - ②子供たちの主治医であった
- ということです。

宇津野研は小児科医で、短歌を佐佐木信綱、のちに窪田空穂に師事した人物です。百合子は、主治医・宇津野と会うなかで、宇津野から歌誌『白檮（しらがし）』が送られたのをきっかけに短歌に触れ、『白檮』に出詠し、『白檮』廃刊に際して『勁草』が創刊したため、宇津野から『勁草』の同人となるよう勧められました。

○雑誌『白檮』とは

雑誌『白樺』が関東大震災によって廃刊したように、関東大震災後、印刷状況の悪化により、各方面の雑誌で廃刊・統合の危機がありました。短歌の雑誌『国民文学』（大正3（1914）年窪田空穂らが創刊）、『地上』（大正9（1920）年対馬完治らが創刊）『朝の光』（大正9年宇津野研、氏家信が創刊）も例外ではありませんでした。大正12

（1923）年の関東大震災の影響により3つの雑誌が合同で『国歌』を大正13年に出版します。しかし、翌年には『国民文学』のグループが離脱し、『地上』『朝の光』の2つの雑誌を出版していたグループが『白檮』を作りました。『白檮』は大正14（1925）年～昭和4（1929）年まで続きました（通巻42号）。

一方、百合子は大正14年にニューヨークから帰国し、『白檮』に入会しました。彼女の記録を見ると、旧号を5部、宇津野から譲ってもらい、以降少なくとも2年間は購読していたことがわかるため、半分以上の『白檮』を読んでいたと思われる。百合子の資料として残っている『白檮』は、全42冊中の27冊。それも、合本（複数冊が1冊にまとめられている状態）として残っていました。

○原田京平（1895年～1936年）とは

画家、歌人。志賀直哉が我孫子を去った後、志賀の家に住み、画家として活動。短歌は窪田空穂、絵は山本鼎に師事。



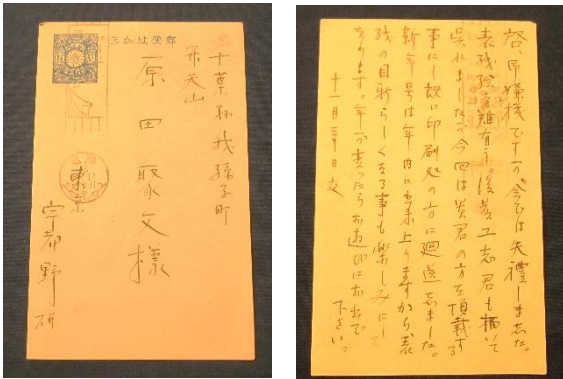
我孫子に住んでいたころの原田一家

○原田京平と『白檮』

原田と『白檮』の接点となる書簡が原田京平資料にあります。まず1通目は、大正15年11月30日付宇津野研から原田宛に出された表紙絵の礼状で、内容を見ると表紙絵は新年号を飾ることがわかります。そして2通目は翌年昭和2（1927）年1月5日付宇津野からの書簡で、表紙絵の評判について綴ってあることから、無事に原田の絵が表紙として出版されたことがわかります。

二人の短歌の師は窪田空穂であり、書簡のなかで「会では失礼いたしました」とあることから、

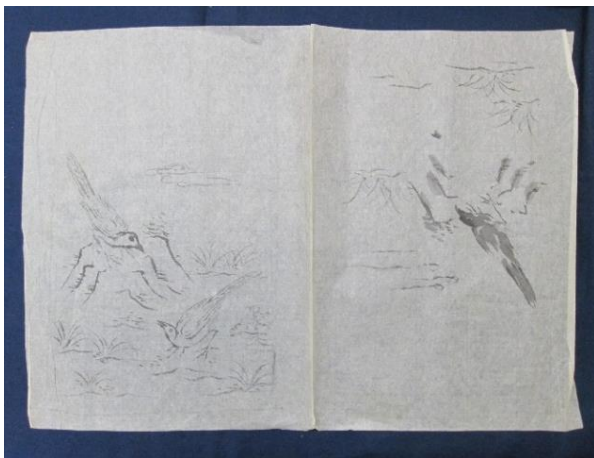
表紙絵を依頼するにあたり、すでに知り合いであったことが窺えます。ただ、この書簡の文面を見るだけでは「表紙絵」が『白檮』であったことはわかりません。



大正 15 年 11 月 30 日付宇津野研書簡

○表紙絵の謎を解く

平成27(2015)年原田京平資料が寄託され、調査を行ったところ、鳥 2 羽が水墨画で描かれた下絵が確認できました。しかし、資料を整理したときはそれ以上の情報を得ることができませんでした。



原田京平水彩画 『白檮』下絵]

時を経て、令和 2 (2020) 年に山田家から志賀直哉及び山田家関係資料資料の寄贈を受けました。そのなかに山田百合子が出詠していた『白檮』が含まれていたのです。

先ほど記したように『白檮』は合本し、保存されていましたが、奇跡的に原田京平資料で整理された鳥の水墨画の表紙となっている『白檮』は唯一合本されず保存されていたことから、表紙絵と水墨画の下絵を並べて確認することができました。表紙絵の原本は、宇津野に送り印刷所へ回送されたことが大正 15 年 11 月 30 日の書簡からもわかります。

○『白檮』が発見された意義
もともと交わることがなかった原田家と山田家の資料ですが、原田と百合子の共通のライフワークであった「短歌」が 2 つの家を繋ぐこととなりました。その証として『白檮』が重要なものでした。原田京平資料群だけでは、『白檮』の存在自体は不明でしたが、山田家の資料にあった『白檮』を見ることで、原田京平資料にあった水墨画の下絵と宇津野研からの手紙の内容を補完することができたのです。まったく出どころが異なる資料が繋ぎあうのは、とても稀なことです。



『白檮』表紙

前号は「禅が結ぶ縁」について、ご紹介しましたが、今回は『白檮』が結ぶ縁」をご紹介できたかと思えます。

文学館では、希少な『白檮』と、原田の直筆の絵を鑑賞していただけます。ぜひ、創作の過程をご覧いただければと思います。展示は令和 4 年 2 月 27 日 (日) まで開催しています。

事務局より

本年もありがとうございました。昨年 3 月から長きにわたってガイド活動が休止していましたが、令和 3 年中に再開することができました。ありがとうございます。いまのところ、新型コロナウイルスの感染拡大も落ち着いていますので、このままガイド活動を続けていきたいと思えます。状況を見ながらできれば 3 月に研修会の開催も検討していますので、決まり次第、ご報告いたします。

また、志賀直哉邸跡書斎のクラウドファンディングですが、皆さまのおかげをもちまして、目標金額を達成することができました！ありがとうございました。達成はしましたが、今後の修復に向けて、1 月 5 日 (水) まで募集を続けていますので、ぜひ、ご参加ください。

次回の月例会は令和 4 年 1 月 11 日 (火) 午前 9 時 30 分から教育委員会大会議室で開催の予定です。年末年始、お身体にお気を付けてお過ごしください。